

徒然なるままに…48

－最近の授業づくりから思うこと－



平成28年8月31日
白鳥小学校 研修部

「もういくつ寝ると…」と心待ちにしていた夏休みがあっという間に終わってしまいました。先生方は、この夏をどう過ごされましたでしょうか。

さて、8月17日に、本校を会場に、市小社研夏季研修会が行われました。ご協力いただいた先生方、ありがとうございます。全体会にて、木村博一先生の講話がありました。今回の講話は、授業づくりについて、示唆されるものがありましたし、私も同じように感じていたところがありました。また、先般の「学力向上研修会」で話題になった「基礎的な内容の習得」とも関わる内容とも思いましたので、一考してみようと思います。



最近の授業について、次の2点の傾向があると感じます。

1点目は、授業者が子どもに学習させたい、気付かせたい内容を明確に持っていない授業です。授業づくりでいうと、学習問題は、設定されているものの、その答えを授業者側が持っていないことです。

現在、子どもの主体的・対話的な深い学びとして、「アクティブラーニング」が重要視されています。また、コミュニケーション能力育成のためには、対話やディスカッションなどの活動を取り入れ、正解のない課題に取り組むことが示されています。その煽りの中で、授業者が問いの答え、言い換えれば、達成目標を準備・設定せず、子どもに任せ切り、言わせっぱなしの授業になっていると考えられます。テーマや問いだけを高らかに掲げ、子どもの活動を多様に設定するだけでは、まさに、子どもが「はい回る」授業になってしまうのではないのでしょうか。

子どもの主体的な学習を展開するためには、子どもが学びの必然性を持つよう仕掛け、思考の方向が間違っていれば修正し、新たに深めるための問いや事象を提示したりして、子ども自身の思考と発想・言葉で深い学びへと導くことが必要だと考えます。つまり、授業者の意図と働き掛けが必要なのです。

そのためには、教材から意義ある内容を見出し、授業として具現化していく教材研究が必要です。その拠り所となるのは、学問の成果や文献などです。社会科の場合は、社会的事象について、社会諸科学（木村先生がおっしゃる「〇〇学的な見方、考え方」）では、どうとらえられているかを調べ、その筋道に沿って、授業者自身が教材をとらえ直して、どういう社会の有り様や人々の姿を見せるのかを明確に持つことが必要だと考えられるのです。

ここで、「教えて考えさせる授業」論について取り上げたいと思います。この授業論は、「自力解決」、「問題解決」、「指導より支援」という方針に行き過ぎを感じ、概念や概念獲得の手続きの理解を重視した「習得」の授業原理として、東京大学大学院 市川伸一先生が認知心理学的な観点から提唱されています。

「教えて考えさせる授業」は、「習得サイクルの学習」における「教師の説明」「理解確認」「理解深化」「自己評価」の4段階で展開されます。（次頁〔資料1〕）

「教師からの説明」は、「教える」段階であり、教師からの説明として、何らかの情報提示をする段階です。教材教具を工夫し、分かりやすい教え方を目指します。

「理解確認」、「理解深化」、「自己評価」は、「考えさせる」段階です。

「理解確認」では、教科書や教師の説明を理解できているか確認するために、子ども同士の説明活動や教え合い活動を取り入れます。

「理解深化」では、誤解しそうな問題や教えられたことを活用して考える発展的な課題を用意します。小グループによる協同解決場面により、参加意識と対話を促します。

「自己評価」では、分かったことや分からなかったこと、疑問などを記述し、今後の授業展開に活用できるようにします。

「教えて考えさせる授業」とは、教師が基本的な内容や情報を教えた上で、問題解決や討論を行おうとする授業論といえるでしょう。明確な目標を持ち、教師の説明と理解確認によって基礎知識の共有を図り、その先に、やりがいのある理解深化課題を用意して、問題解決、探究的な活動を展開するのです。この学習行動は、まさに「研究」であり、教師も科学者も行っていることなのです。

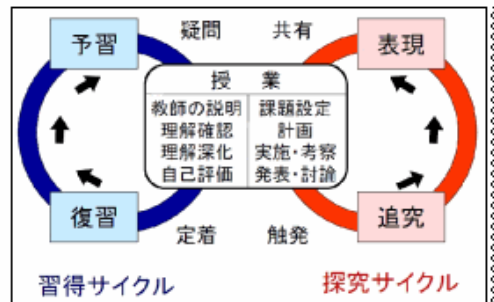
二つ目は、授業づくりの形式化です。「教科書に書いてあるから。」「しなきゃいけないから。」として、単元・授業展開してはいないでしょうか。そのために、授業が形式的になったり、あれもこれもと、焦点化されていなかったり、子どもの願いや教師の意図に反したりして展開されてしまうこととなります。結果、無駄に時間を費やすことになったり、子どもの思考や学びに沿わない活動になってしまうことが考えられます。これは、「これまで、そうしてきたから。」と、ねらいや意味を問い直すことなく続けられる行事や活動にも言えることです。

授業をつくることは、そんな容易いことではないと思われるかもしれませんが。だからこそ、したいことを見つけて、徹底的に当たり、調べ、こだわってみてはどうでしょうか。この教材でどんな内容がねらえるか、どんな活動が仕掛けられるかを考えることによって、楽しむ授業づくりを展開することができ、先生方一つ一つの持ち味が活かされるのではないのでしょうか。これは、学習内容や活動の精選することにもなると思います。

先般の学力向上研修会でも挙げられたように、本校の学力調査の結果から、少しずつ子どもの思考力・判断力・表現力が伸びてきていることを感じます。これは、子どもの思考を仕組む、「学び合い」のある授業を目指してきたからではないのでしょうか。これからも、子どもの思考に着目した授業づくり・授業研究を、教職員の協働のもとに進めていきたいと思います。

[参考文献]

- 市川伸一 『「教えて考えさせる授業」を創る－基礎基本の定着・深化・活用を促す習得型授業設計－』図書文化，2008。
- 市川伸一 『「教えて考えさせる授業」の挑戦－学ぶ意欲と深い理解を育む授業デザイン－』明治図書，2013。
- 正木友則 『「教えること」と『学ぶこと』に関する検討－村井実の教育学を視座として－』、『創価大学大学院紀要34』，2012。



【資料1：習得の授業としての「教えて考えさせる授業」】